

評論シリーズ 四

婦人戦線に立つⅡ

高群逸枝

目次

わが国男性諸君に見参	五
一、長谷川如是閑		
二、山川均・森戸辰男		
三、平林初之輔		
四、千葉亀雄		
五、大山郁夫・細道兼光		
生田花世さんへ私信がわり	二八
無政府恋愛を描く	三六
美人論	五四
階級道徳と無政府道徳	六八
高群逸枝	七九
我等の婦人運動	八八
私はこう思う	九八
婦人戦線一年・婦人思想史	一〇九
夜を行く	一三〇
恋愛と性欲	一三三
現行国定教科書批判	一四四

わが国男性諸君に見参

(一) 如是閑長谷川の正体

一

長谷川君によれば財産が私有的に発達するに従つて、女子の分配が不公平になり、事実上、富裕階級の多妻制と貧困階級の無妻制とが一般に行われるようになってきた、そこで、無妻といつても、全然性的衝動を無視することのできない貧困者は、勢い結婚制度以外の方法で満足するようになる。ここに性の娯樂的傾向および様式が発生したというのである。

すなわち、長谷川君は性の娯樂は全く貧困階級の性的要求に根ざすもののようにいう。

これは一応もつともな議論のように思われるにもかかわらず、それではどういふ娯樂機関および様式となつてそれが現われたかと訊ねてみる。早い時代においては吉原とか、島原とか、丸山とか、その他宿場における茶屋というようなものがそれだといふが、それらのものが果して結婚困難による貧困階級の性の不満に基づいて出現したのか。否、これら

のものは江戸とか京都とか長崎、あるいはまた宿場を行き交う商人達の富の上にきずかれ
た、そしてそれらの富裕な商人達のための娯楽の機関として生まれたものではなかつたか。
昔から性の娯楽機関は、都会においてのみ発達する。それは都会というものが市場とし
て、すなわち営利の中心としてそこに多くの富が集積もしくは浮動するからである。

二

私は性の娯楽の起源を、かく富の集積もしくは浮動にもとづくものであると考えるが故
に、財産の私有的発達に伴う富裕階級の多妻性そのものが、既に明らかに性の娯楽の一様
式であり、その発端であると信ずるものである。

一人の帝王が、その後宮に数千の美女を蓄えるということは、最早や生殖的の意味はな
く、性の娯楽、性の遊戯、性の玩弄の意味しかそこにはない。

そして昔から今に至るまでの、あらゆる性の娯楽は、その性質において、その発生の過
程において、明らかにこの驚嘆すべき多妻主義者と軌を一にするものである。即ち、今日
における性的乱脈の状態は、この多妻主義の延長もしくは普遍化にしか過ぎない。

私有と共有の違いはあれ、大と小の差はあれ、それらの性の娯楽、性の遊戯、性の玩弄
は、その性質においていわゆる性の不満から生じたのでなく、性の過剰を意味し、その発
生は富の集積および浮動に基礎づけられるものである。

とはいつても、私も全然如是閑君の説を、根本的には否定しても、副次的な現象として

二内

は受け入れられないものではない。結婚困難による性の不満を、遊廓とかその他の場所におい
て緩和するものが多いことは言うまでもないことである。しかし、そこには尙且つ生殖的
な真摯さがあり、娯楽的な意味は稀薄である。従つて現在にあつては多く労働者階級を客
とす娼妓を擁する遊廓のごときは、性の娯楽機関としての意味を失い、富の集積および
浮動に基調する他の娯乐的、遊戯的機関および様式が、新たに発生し、発達しつつあるか
に観察される。

三

近代都市の性的享楽状態の動因について、如是閑君は大産業組織の結果、経済的圧迫を
蒙り、性的衝動のもつとも旺盛の時期において、制度的性交の不可能な状態におかれるた
めに、遊戯的性交に這入つたものであり、それが今日の性的享楽状態を展開したものであ
るといふが、それは副次的な動因ではあれ、あくまで今日の性的享楽状態の主調をなすも
のは近代都市における富の集中であるとわたくしは信ずる。

近代享楽主義（モダニズム）が、世界における富の集中たるアメリカにその故郷を有
しているのからみても、富の集中こそ生活の娯楽化、遊戯化の動因であつて、かのヘテレ
と称する娼婦階級を出した享乐的ギリシャ時代が、当時の支配階級およびそれに属する市
民の豊かな生活に根づけられていたように、近代都市におけるモダニズムおよびその属性
たる性の遊戯化もまた、明らかに近代支配階級およびそれに属する市民の富の上に築き上

げられたものであることは言うまでもないのである。すなわち、彼のいうように、近代都市の享樂化が、無産階級に基礎づけられているかのような口吻は、到底受け取りがたいこととて、それどころでなく、かのギリシヤ時代の享樂の陰に、限りなき奴隷達の痛苦があつたように、近代都市の享樂の陰にも、また限りなき無産者の痛苦が横たわつていたのである。すなわち、近代都市の享樂化は、無産階級の性的不満をいやすどころでなく、それを踏みこむることによつて、そのいわゆる明るい乱舞、朗らかな行進をつづけつつあるのである。かくて富裕階級の多妻主義と、貧困階級の無妻主義は、近代大産業制によつて、さらに一層極端化しつつあることが知られるのである。

四

結婚困難による性の不満が、性の娛樂的展開を基調づけるという議論は、これまでも度々聞かされてきた。例えば公娼制の廃止を拒む理由として、營業者側もしくは政府筋の役人あたりの言うのを聞けば、公娼制は社会的必要——即ち結婚困難による性の痛苦を救わんがためのものであるというのである。もしそうであるとすれば、それらの性の娛樂機關は未婚者もしくは独身の男子によつて占められている筈であらうにもかかわらず、村島焯之君の書いたものによれば、妻帯者の遊客の数は非常に多く、現に大正三年から同六年に至る四ヶ年間の和歌山県下の遊客十六万六千余人についての年令調査によれば、二一歳以上二五歳未満の比較的無妻者ならんと想像される者の数は全数の二割三分に過ぎず、二

三外

六歳以上四十五歳の者最も多く、四六歳以上の遊客も侮りがたい数を示している。これによつて見るも、公娼制度は必ずしも独身者の性欲調節機関ではなくて、むしろ有妻男子の遊蕩機関であるかの觀を呈している。と村島君はいつてゐる。

即ちここにも性の娛樂が、性の貧困よりはむしろ性の富裕、性の飢餓よりはむしろ性の飽満と退屈に基づく一種のせいの沢的な現象であることが看取される。

経済的な理由による結婚困難、そしてそれに基づく性の痛苦と不満は、無産男子のみならず、無産婦人もまた強烈に感じさせられているのであるが、それにもかかわらず、彼女達が性の娛樂の機關および様式をもつてゐることはまるでないが、それに引きかえて、幼少の頃から結婚を唯一の目的かの如く教育され、婚期のきたるや晩しと待ち構えて、何不自由なく結婚させられる富裕階級の婦人達の間には、かえつて役者買いか、パトロンの名において男妾を蓄える傾向や、その他客室とか広間とか、夜会とか、舞踊場とかあらゆる社交場裏における性の娛樂の方法や空気が醸し出されているのを見て、性の娛樂がいかなる生活の上で發生するものであるかということとはわかる。

すなわち、満たされない無産階級の性は娛樂的、玩弄的、遊戲的には発動せず、もつと真剣にか、あるいはもつと純心にか——即ち生殖的に展開すべき運命をもつものであり、飽満と退屈との有産階級の性こそ、娛樂的、玩弄的な性的乱脈の状態に到達する動因を孕んでいるのである。故に近代における滔々たる性的遊戯は、いうまでもなく、ブルジョアジの乱舞であり、そのあり余る富の集積に基礎づけられるもので、無産階級にとつては、

それらの風潮は少しの「現実」的な意味も、「新時代」的な意味も、「過渡期」的な意味すらもないものである。何となればそれらのすべては明らかに「彼等」のものでしかないからである。

長谷川君は、性の娯楽を以て、富に基礎づけられず、貧に根づけられるという定義をくだし、その結果、現代の遊戯的享樂的性の乱脈状態を必然的の「現実」的「過渡期」的現象であるとしてゆるしている。

しかし、性の娯樂化、玩弄化は、あくまで富裕階級のものであることを知る無産者は、今日の性的乱脈の状態を、ブルジョアジーの乱舞であるとして酷烈に排撃し、そうした状態に伴う遊戯的恋愛観を否定し、それらのすべての影響から自己階級を守らねばならない。(共産党連中の性的遊戯を庇おうとする時、いかにそれが反動的のものになるものか)

五

長谷川君の無産者の性問題に関する無理解は、現実の問題から、さらに進んで将来の社会における無産者の性的表現の問題にまでも及んでいる。

彼は社会と性との関係について、性は個人的衝動があるが故に、社会的制約を受ける必要があるという見地において論じている。

すなわち、長谷川君は、野蠻社会においても制度でゆるされた以外の性の実行者は殺されたと言ひ、性に対するそうした束縛は、我々が社会的生活者である以上においては当然

なことであるといっている。

けれども、われわれは考える。そうした性に対する束縛は、性そのものの乱脈を恐るるが故に必要とされるものであるか、但しはそれが社会の政治的、経済的基礎を危くするが故にあるか、もし社会の政治的、経済的基礎が、一部支配階級のためのものでなく、万人のための安固なものであるならばあるほど、いかなる性の自由も、少しも社会の秩序をみだすものでないどころか、かえって生殖の自然——生殖はそれ自らの中に正しき方向と秩序を有している——を正当に生かすことによつて、人類の福祉を促進するであろう。

性に関するタブーは、一部権力階級の利己的な政治的、経済的欲望の故にのみ必要とされたもので、必ずしも社会生活に伴う必然的、宿命的な約束ではないどころか、最も安定し、最も発達した、そして最も正しい社会生活にあつては、すべての生存の自然と共に、生殖の自然を尊重し、それを自由に、そして十二分に生かすことこそ、その社会の光榮ある使命であり、必然的な任務であろう。即ち不正な社会ならばともかく、正しき意味における社会は、性の自然に拘束を加えるどころか、性の自然を理解し、生かし、伸ばす方向をもつものである。

六

「甚だ原始的な時代から既に人間は性的習慣を厳しい法則の下に行なつた」という長谷川君の言葉は、かの原始時代の性的自由説に結びつく近代婦人の自覚および希望を踏みに

じるかの如くである。

しかし、必ずしも私は彼の説を否定はしない。原始時代の経済的あるいは権力的欲望の芽生えと共に、そうした性に対するきびしい制度もまた始まったであろう。だがそれらもちろん全部ではない。例えば今日において最も原始的な生活状態を保っている農村——そしてその農村の中でも最も開けない山地の僻村であればあるほどそこには性の自由が承認されてありはしないか。そうしてみれば、必ずしも原始時代の全部面にわたって、性に対するきびしい制度が行われていたとはいわれない。そういうきびしい制度の行われたのは、原始時代にあつても、最も搾取的な——即ち全部が労働者でなく、既に支配者と被支配者とに分裂し始めていた頃のことではなかつたか。

ここにおいて、非搾取的な経済組織のもとにあつては、必ずしも性の自由が社会生活と矛盾しないのみか、必然的にそれが承認される——即ち言いかえれば搾取主義の社会的性的表現はそれを社会的に拘束することであり、非搾取主義の社会的性的表現は、その自然を生かすことであるということが考えられてくる。

この意味において社会のためには性の自由を拘束することが当然だという論議は誤まつており、最も正しき社会は性の自然——即ち生殖の自然を生かすという自覚こそ、正しとしなければならぬのである。

長谷川君最近遂にマルキスト化する。また当然とすべきであろう。マルキストは現代におけるソフィストで、マルクス主義哲学は非常にかの唯物論および弁証法の速き先祖たるギ

リシャの詭弁派哲学と似た根底の上に立っている。然して長谷川君の存在は確かに一個の詭弁派哲学者たることを示していたのだが、今や遺憾なくその正体は暴露されたのだ。

附言

長谷川君は、性は個人的の要求だから、社会によつて制縛されねばならない、という主張のもとに、制度婚の範囲において、性生活の限定されるべきことを至当としている。但し、現在の性の乱脈状態は無産階級に制度婚すらが与えられなかつた結果であるから、これは過渡期の現象として見のがすべきことだといっている。彼の所説は全然に逆立ちした根柢の上にきずかれています。彼はこの意見を「社会問題としての性の娯楽」という見出しのもとに発表している。